

疑似同盟を後押しする： 米印関係、1962年中印国境戦争、クリシュナ・メノンの失脚

ジェームズ G. ハーシュバーク
(ジョージワシントン大学)

1962年の中印国境戦争は南アジアの同盟関係を一新し、ジャワハラール・ネルー首相による非同盟への熱い肩入れをぐらつかせ、米国は共産主義中国への抵抗に支援の手を差し伸べることで念願のインドとの緊密関係を手中にする機会を得ることになった。しかし米印関係の緊密化を主に阻んでいたのは、インド国防相クリシュナ・メノンの存在であった。米国の冷戦政策を痛烈に批判するソ連支持者だったのである。紛争の対象となった国境地帯で、中国からインドが軍事的痛撃を被った結果、メノン国防相は失脚した。批判が広がったため、ネルーは長年親交のあったメノンを不承不承ながら解任せざるを得なくなり、結果的には米国との関係、決定的には米国の軍事支援を密にする道が開かれたのである。

これまで機密扱いとされ公開されてこなかった米国（およびカナダ）の文書を使い、本稿では米国ジョン・F・ケネディ大統領政権による努力、とりわけケネディ大統領がニューデリーに送り込んだ駐インド大使であり、ハーバード大学の著名なリベラル派経済学者であるジョン・ケネス・ガルブレイス氏による密かな働き掛けを立証する。メノン更迭を内々に促しつつ、インドへの内政干渉という非難を誘発するような評判を回避しようと努力したのである。特に、最近公開されたガルブレイス氏の私的日記にある資料を、本稿では利用する。その日記には30年前に出版された同氏の著書 *Ambassador's Journals*（「大使の日記」）では削除されていた反メノン活動の記録がある。また、ホワイトハウスのテープ録音の書き起こしを含む記録も利用し、ネルーが中国に抵抗する実質的軍事援助を期待するのであればメノンは去るべきだというケネディ個人としての、また大統領としてのメッセージに光を当てる。さらにはカナダの記録に頼ることにより、在ニューデリーのカナダ高等弁務官であった中国専門家のチェスター・ロニングが果たした知られざる役割についても実証する。ロニングはメノン、ガルブレイスの両方と節度ある関係を維持していた。

このような秘話は、米国政府がいかに巧妙かつ大胆な行動によって他国政府の内部構造に影響を及ぼしたのかを明らかにしてくれる。同時に、かつては友好的であったアジアの二大国の間に生じた紛争が如何にしてインド政府の態度に新たな流動性をもたらしたのか、その力学をより深く理解する手掛かりとなる。インド政府は米国がインドとの連携を深める新たなチャンス差し伸べたように思われたが、そのために米国は長年の同盟国パキスタンへの不信を深刻化させるという犠牲を払わなければならなかった。パキスタンは米国にとって公然の敵、中華人民共和国との関係を深める方向へと進んだのである。